

洋燈らんぶの灯る家

作・村尾 悦子  
原作・夏目漱石『門』

【登場人物】

野中米  
野中宗助の妻  
野中小六  
野中宗助の弟  
安井光太郎

【時代】

明治四三年 ある晴れた冬の日。

【場所】

東京、野中宗助の家。

舞台は崖下にひっそりと建つ小さな借家、野中宗助の家の座敷。座敷中央の天井からは洋燈が吊り下げられている。奥には茶箆筒と小さな仏壇、中央には火鉢があり、その上に鉄瓶が置いてある。鴨居には宗助の通勤用のコートと帽子がかけてられている。下手奥には玄関や台所に通じる入口がある。縁側が手前から上手にかけて垂直にぐるりと取り囲んでいるが、上手の障子が閉められているため普段は上手側の縁側は見えない。上手縁側から庭に隣接する裏の崖が見上げられる。崖の上は大家の坂井の邸宅の裏庭になっている。上手縁側には空っぽの鳥籠がおいてある。下手は襖になっており、襖の先は小六の部屋。

米が花を活けている。花を一心に見つめ、心を鎮めるように真剣に活けている。米、一本の花を持つと花ばさみで切ろうとする。

米 (小さく)痛い！

米、指先を見ると、少し血がにじんでいる。血が止まるよう指先をなめる。指が落ち着いたので、切った花を花瓶に挿して、少し眺め、それを持って立ち上がる。奥にある小さな仏壇のところに行き、花を供えて、手を合わせて軽く拝む。

米、もう一度指先を見る。また血が出ている。懐に手を入れてハンカチーフを取り出す。同時に一通の手紙が米の懐から落ちる。米、指をハンカチーフで巻きながら落とした手紙を拾い、座る。手紙を開いて読み始める。しばらくして読み終わるとまた懐にしまう。米、立ち上がると、上手の障子をあげ、縁側に出る。米、縁側から見える裏の崖を見上げている。

玄関が開く音がして、白線の入った旧制高等学校の帽子をかぶり、長い黒マントを着た小六が風呂敷包みを抱えて入ってくる。

小六 嫂さん、もうすぐ安井さんが来る。

米、振り返る。

米 え？

小六 今、坂井さんのところに行ったら、ちょうど会ったんだ。だから言いましたよ、「来てほしい」って…。

米 そう、どうもありがとう。あの人、来るって？

小六 うん…、来るって…。

米 どんなふうだった？ あの人の。

小六 最初、嫂さんのこと言ったら驚いてたみたいだった、しばらく黙ってしまっただけど、そのあと「じゃ、行こう」って。

米 (ゆっくりとうなずいて)来るのね…、あの人が来るのね…。

小六 来ますよ。大丈夫ですね。

米 ええ、もちろんよ。

小六、ほっとして、風呂敷包みを置く。

小六 坂井さんのところに前から借りたい本があって今、行っただけですよ。そしたら廊下でばったり会って…、それで思い切って声をかけたんです…。

小六、マントを脱ぐ。

小六、宗助のコートを見ながら

小六 兄さん、まだ帰らないんですか？

米 ええ…。さつき手紙が着いたわ。まだ当分あっちにいるって。

小六 そんなに長い間役所を休んでくびにならないのかな…。

小六、脱いだマントを宗助のコートの横にかける。

米 届を出してあるから大丈夫でしょう。

小六 (帽子を脱ぎながら)しかし、僕ならごめんだな。そんなに長い間、寺にいらなんて。頼まれたって願い下げだ。(帽子をマントの上にかける。)どういう心境の変化だ…、坐禅を組みに鎌倉に行くなんて…。

米 あ、いけない。

米、花ばさみと花の切りくずが出しっぱなしになっていることに気づき、花ばさみを茶箆の引き出しに入れ、花のきりくずをくず籠に捨てる。

小六、火鉢の前にしゃがみ込んで、手を温める。

小六 ああ、寒い、今日は一段と冷えるな…、そうだ、嫂さん、玄関、凍ってますよ。

米 (うわの空で)そう…。

小六 下駄が滑ってあやうく転ぶところだった…。嫂さんも氣を付けた方がいい、あの敷石、踏まない方がいい。

米 そう…。

小六 あ、それから…、安井さんに、坂井さんには内緒にしてくれって言った…。変な風に勘ぐられるといやだからな…。

米 そう…。

小六 今日、みんなで墓参りに行くらしいんだ、坂井さんち。

米 そう…。

小六 ほら、弟さんもうすぐ蒙古に帰るからその前にみんな揃ってってことで…。

米 (思いついて)あ、お茶…。

米、茶箆の引き出しをあけて急須と湯呑を出そうとする。

小六 安井さんは一人で神田にでも出かけようと思ってたみたいんだけど、そういうことならみんなが出かけた後、こっそりここに来るって…。

米 あっ。

米、急須を落としてしまう。

米の手がかすかに震えている。

小六、米をじつと見る。

小六 (心配そうに)大丈夫ですか？

米 大丈夫、ほら、どこも割れてないわ。

小六 そうじゃなくて…、手…。

米 (ハンカチーフを巻いた指を見せ)ああ、これ？ 庭の椿がきれいだったから…。仏壇に供えようと思ったんだけど、間違えてちよつとはさみで切っちゃったのよ。もう大丈夫、血も止まったわ。

米、ハンカチーフを外すと懐にしまう。

小六 でも震えていますよ。

米の手、まだ震えている。

米 (自分の手を見て)ほんと…、どうしたのかしらね。

米、両手を合わせ、手の震えを止めようとする。  
しばらくして…。

米 治まったみたい…。

米、手を見せる。

小六 安井さん、呼んだの…、本当に大丈夫なんですね。  
米 もちろんよ。

米、急須と湯呑を盆に並べ始める。

小六 タベ、嫂さんがどうしてもって言うから言ったけど…。なんだか嫂さん、さっきから変だよ。

米 ごめんなさい、久しぶりに会う人だから、ちよつと緊張してるだけよ。

小六 安井さんとはどんな関係なんですか？

米 え？

米の手が止まる。

小六 嫂さん、「昔、とてもお世話になった人だ、どうしても会いたいから呼んできてくれ」  
って、そういったよね。だけど、安井さん、「じゃあ、君は野中の弟なのか？」って…まる  
で兄さんの友達みたいに言ってた。

米 ……。

小六 兄さんの友達？ だったら兄さんがいないのにわざわざ呼んでも…。

米 小六さん…。

小六 はい。

米 タベは、あまりきちんと話せなくてごめんなさいね。ちゃんと話した方がいいのはわか  
ってただけど、うまく言えなくて…。安井さんは確かに兄さんの昔の友達よ…。

小六 そうか、やっぱり…。

米 そして、私の前の夫なのよ。

小六 え？

米 安井さんは…、私が宗助さんと、あなたの兄さんと結婚する前に結婚していた人なのよ。

小六 なんだって…。

小六、絶句している。

米 驚いたでしょう？ 私、あなたの兄さんと結婚する前に一度結婚してたの。それが安井さん…、そして安井さんと宗助さんは京都の帝大で同級生だったのよ。

小六 ちよっと待ってくださいよ…、どういふことなんですか？

米 だから、安井さんは…。

小六 そうじゃないよ！ そんな人呼ぶなんて…。兄さんがいないのにそんな人呼ぶなんて…、だめだろう。

米 そうかしら…。

小六 おかしいよ。僕、断ってきます。安井さんにやっぱり都合が悪くなったので来ないでくださいって今、言ってきましたよ。

小六、怒って行こうとする。

米 違うのよ、待って。

米、小六を引き留める。

小六 何が違うんだ？ いったい何考えてるんだ。

米 お願ひ、聞いて。

小六 あなたは、この家で昔の旦那と密会しようってのか？

米 密会なんかじゃないわ。ただ会いたいなのよ、会って話したいのよ。

小六 兄さんがいないのに…、なにもそんな時に会うことはないだろう。しかも僕をその使いにするなんて…、失敬だ！

米 ごめんなさい。でも、そんなつもりじゃないのよ。あなただって知ってるでしょう、あの人の、もうすぐ蒙古に帰ってしまうの。坂井さんの弟さんと一緒に帰ってしまうのよ。

小六 だからなんなんだ。

米 今、会わなければもう二度と会えないのよ。一生会えないの。だからお願いしたのよ。

小六 今さら会って何を話すつもりなんだ？ 別れた夫をわざわざ呼び出して何を話すつもりなんだ？

米 私、謝りたいの…。あの人にちゃんと謝りたいの。

小六 謝る？

米 私、あの人を裏切ったの…。裏切って宗助さんと結婚したの。それをきちんと謝りたいのよ。

小六 裏切ったって…、どういうこと？

米 私、あの人と結婚していたのに宗助さんと…。

米、それ以上言えずに黙ってしまう。

小六 それは、つまり…？

米、かすかに頷く。

小六 なんてことだ。いやらしい。

米 今は何を言われてもいいわ。私、安井さんに会わなければならぬの。

小六 安井さんは嫂さんのこと姦通罪で告訴しなかったのか？

米 ……そんなことされなかったわ。そんなことされてたら今頃こんなふうにならぬと暮らしてはいられなかったわ。ねえ、お願い、安井さんに会うこと、許してちょうだい。

小六 そんな人、会ってどうするんだ？ きつと責められるに決まってる。ののしられるに決まってるよ。

米 そうかもしれない、でも、どうしても…。私、あの人に何にも謝らないまま今になってしまったの。あの人、私のせいで人生が狂ってしまったのに。

小六 何言ってるんだ、そんなこと、今頃になって言ったって…。

米 ずっと気がかりだったの、あの人はどうしているか…。それが偶然、坂井さんの家に来てるのがわかって…。なんだか今、どうしても会わなけりゃいけないような気がしてきたのよ。

小六 だけど、じゃあ、兄さんはどうするんです？ あなたが安井さんと会ったこと知ったら兄さんはきつと…。

米 あの人はわかってくれるわ！ だってあの人と同じなんだもの。あの人とも安井さんを裏切ったことでずっと苦しんでたのよ…。だから鎌倉に行ってしまったんだわ。

小六 じゃ、兄さんが鎌倉に行ってしまったのは…。

米 そうよ、安井さんが来たからなのよ。やっと今になってわかったわ。あの人、坂井さんから聞いて、安井さんが来ること知ってたんだわ。だからずっと悩んでたのよ。毎晩、うなされて…。神経衰弱みたい顔色も悪くなって…。この所ずっと変だったの。それで突然鎌倉に坐禅を組みに行つてくると言つて出かけてしまったんだわ。

小六 おかしいと思つた…。こんなに長い間…。でも、じゃ兄さんは安井さんから逃げたつてことかな？ 安井さんに会うのを恐れて寺に籠つたつてことかな。

米 逃げたんじゃないわ、宗助さんは自分の気持ちと戦つてるのよ。いろんなこと自分の気持ちが強ければ乗り越えられと思つてるんだわ。

小六 やっぱ無理だ。嫂さん一人で安井さんに会うなんて無謀だよ。会つたつてうまくやれるはずがない。

米 でも今、会わなければ一生後悔するわ。

小六 ……。

米 お願い、小六さん。

小六 いや、だめだ…。

米、上手の縁側に出ると、窓から見える裏の崖上を指さす。

米 見て、あそこ。あの崖の上、安井さん、こないだからずっとあそこに立つてこつちを見てたのよ。

小六 え？

小六、縁側に来て崖の上を見る。

米 毎日、夕方になるとあそこに立ってこちらを見てたのよ。

…  
続く